神祖御文

四十三
五三

服部文庫
イ17
114

神祖御文

117
114

一 学ニ入ものハ日増ニ修業ニ可出精事ニ候得ハ精々
少時より芸事にも等閑なく我々も成丈ケ手を掛
小児ニハ猶以之を為なしに候而ハ御国恩ニ相背候
衆ニ候ハ右之段々承知いたし表ニ顕し候

一 竹田様ニも成人いたし候ハ夫々其道ヲ家業ニ致候ハ勿論ニ附
人ニ至迄とも相互ニ申付ヶ置候人を友と

一 悪事ハ一統ニ而も我儘成者ニ付ヶ重々しからす
是ハ差別無之我儘ニ而取計ひ候事ハ是非夫々相心得
中ニ入候者ハ猶以生々ニ相守り候様

一 幼少之者ハ利発よりも遊び事を嫌ひ第一ニ成人之上
家業を随分致候者ハ第一親兄弟ニ孝行を尽し

117.2501

は親よりゆづりの様に候へは古伝を着しよろしく候ゆへ[illegible]
人をえらひ極めて国郡を治るには[illegible]と申候
相伝は一師御かたへ参り候はゞ[illegible]申候
名人は主君にて宗丸御にて[illegible]候はゞ[illegible]大事
[illegible]は[illegible]様に[illegible]に二[illegible]割[illegible]
人の[illegible]と同し事なれは[illegible]一二[illegible]
枝[illegible]成[illegible]深く枝を[illegible]成[illegible]
枝かき[illegible]年に[illegible]枝を[illegible]
木に成人[illegible]深くの人と[illegible]
枝の[illegible]ぬ[illegible]枝[illegible]人と成[illegible]
御かた[illegible]枝[illegible]

あきらかなる[illegible]にて[illegible]
こき枝[illegible]
[illegible]は[illegible]三[illegible]生[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]
成人[illegible]一[illegible]御かし[illegible]
ゆへや[illegible]ときおやと[illegible]
のちは親[illegible]
あやと[illegible]
は御かよ[illegible]仕付[illegible]
[illegible]

申也の称を申付置候事ニ候へ共出入之時ハ毎度盛をも
叱り又されたれハ称ニハ替さぬなおくらしつゝ申事も有ケル付而向
うちあけ言申し第一親をとこふらはねと人にもはしみつく
御かまり親ハ孝行ニ仕る事ありて申しこそ上小身者と
遠ひ在仕候の申る付能事ニ能申る申事ニ申事まいらせ
おやまれる内ハほしこそて親の法ぬ附候ニ成秘伝
子ハ分忠節を失ひける古今多く有之也とく岩子例をて在
少なりの在第一慈悲と不忠（孝行と矢陰）心とも慈悲計かけ武士の子御
おかよりも申事之ハ自能と身ニも能成与ても男房とか
申ハ定守る申ハ後庭ニ在男いる有と　男よく候申る申事一のよし
未御かく出川あ頼大名ハ毎度申ささて存候とらして

男子ほしがる所いかやうなる者の事とても是非なくう
きものゝ法度の男子は丈夫にてハ猶さらの時の用にたて
ぬ者にてとかく上よりハ何事にもよく慈悲をかけいろ／＼
偏頗なく賞罰を正しく臣と男のまことも能なる人にて
能く臣下のての大名なれハかし仕置たくてハ大名の足
いたくしとかく御おし者ニさめしつかひ申ものへ申るを
よく心得もなく此段ハ御申中のさむなき事にて専一し
こしらへ人ハ人ほ徳ニて身持正しくあいたくん

一　口のまし候て能ニ無礼儀の事叶ひ変る大きき事に人
第一　口のまして親へ（と苦ちあや）ニ見へつき下され
第二　親子にしまれ　第三　朋友なるしまれ

第四 正体のあることなれ 出家 和尚をたくもかるべし
なしたる者の為に成仏を得させたまひて天道をうしろ
後生を照らししめ給ふべしよりかたき人に卿かより
御こと自然になしぬるを能くしいねにて候を見たる人
一 大名は無風を格別に男よりはめしつかひ若げ様とも仏様
なる者を中々の事を云りはよくより能く仏様に候え共さつ申し
無理より一江男といふものひとつとしてとふ子の分これ思ひ見るべし
一 卿かたちはいまる者やしなひかうきものにもののいはより様
め様仏様とてたれとてとりより出てやうすきてい都の下の
様子なりけり心地の心すくなりし者の様ひ
もとの名のある筆或は大名の家ぞかしのこと

筑子孫まで十何ヶ国の代々より護付けられ何の土地にもうつるまじ
まだ言のなし様なりし人々もしりしらぬ
卿かよりかの中のそのめでたくなしぬやしき家あるにこそ
とかく成人の様有徳也高く長刀弓術にこころつて
中る水なく読なくてたのしぬ筆の事
一 要の大名自分見てかくし為に及ぬる事ありて其才何の出
事なきその子その分のしきうきめのこころの第一理学意
のこと切る心のよき人のきやしき心得名将にて候
係の主君をも仕へし主君なく一代の四郎と失い
人の中の器をうきめの我が心の有の中の為にする事
かくことをして申すべき

一 とかく人のみちハ百姓町人ニ至迄それの外ハ行ハす
礼儀なくてハそれの事も知れぬ物なりつ禄のかうんたいの
いかよふにしてもすく家ハ立ものと知るへし中々
事さしの所ともひのたしかハ見てくさぬ所にそなく
ましきのいとしぬ中に残さてハ皆禄く所の行ひなれハ
一 善悪ハ人ニたのめぬるものかハ直しなす悪ハ皆無
よろこひその度ニ其所徳ことにしあい善を行へまし
そのゆかりのときりしかりつくハ只何事に付て照し
州の善悪ハその席にて糺し家中の善悪民百姓の九
州清み事につき知れ易きことも見てく所の善悪を守る事ハ
好きらいハ信ぜまで気ニ付ひとつ主人のかりに中々よ

なりけれは少しなくとも守るに及ひよろしく人ハ君臣ハ臣こゝろみを
主君言を聞と守る事に一州のをするひゆへて天地の
みちひみたなるもとしより大事に至りたるものか一の志すにそなく
めしつかいその利口をてきそうん志の臣入所にそてなる
こともに出成すのをえてここに在任るの第一の事なく
一 井伊兵部事平日ニてもえすくなく何事も人にいふを承り
居気ままにみえてもより何事もろう百姓し女性直に申たい
見てしれるを家来の何そろう宿直ひつ評判ひつ人の
為にならぬことハこれ人のかわり乞而にて静に善悪
とり志まてハ夫が後々みなその事に先例お沙汰ろ振舞
おたすかりし

一 此のたしなまるゝ人ハこまかにさしひかへて心得候てこそ
事にて候人間扱のかざりぬやうにおもふ事なきハ
四季をむかへいろいろの花をみて何事も詠めなど
しだまし中にむかしをしのびききてなき人の
事をも思ひ出しおもはれ九涯の心すみやかにて
まち合葉にてそのかく何歟も人のあはれさこそハ
うきよのあきさ何そのほかに入事ある木のかのへあまて事一に
自身不得ての事ハ人のいふすそいかにきこしひたすら
有之てるにふれ大公の別していはなるやうにたく移
本中ねころまて碁を一向におはしたる人の打さしてあまりの事

気はまはすして閑むたてぬるやうにいかにもかねて人のめには
なきもの也たゝかねての事に候ほと碁をあそばさハ万
事の流れより歴きしたなるを知るにほとなしのしかし
をかくにいしまにたなて可申何事もさせ人のためにまかせ
こしいかより被とめぬ事のもれくて自分気にて入候
故にハしかは気に入ぬ者を悪しかとぬ方に付す
ころさへあるさて此のちかのにいるなるさく
一 幼少より気に入ぬ事と申事のす時例にあり
りの根となきかしのおとそんしまもし気也
とたこの心はすておきし事にかりしおやの毒を悟
とゆえてそんかし気にかけてるく葉を用ひほのかぬ

やまこの術も成人の猛をもなして其中へ入ぬるゆゑにして
敵とそこふいろまし者てさえ今日のつまじの日々
の事に名我を損じてその兵具の手立の方は右
作りの業にいしぬてとやとて新殺策の法しく
りしきる中にあるし相を成り事多く痛策根入
かくなしぬ先事ひろやしなとすこしくよく

一 忍びの事中々とかりのよん事に一人なりすわの藝術と
いみんなくてハ殺しあるしたる者成しぬ夫ゆすてに
天下にかなひみるつのきしはい命しいぬを忍びの理
に叶ふる先祖よりの一郡一城をうしなはぬ忍び人御

深からし忍びの術にてよく忍びを用ゆるを
人に知りつつあめしつ上きの兼武百姓の必爵を
引ふす諸きとめくみ進にされたすさす其に仁の忍なき
君につくて身命を顧みず一度の約をたがはずこれ義
の忍びなり人の事を先にして身の事共のちにし勤な
深くして利害に出なする其れの忍びや我ゆかり十して
人となしいかしろにすることしかはれ其に記れ忍びのたすけの天文
いつするよりかわりそめるに表裏極意となすきす古法と
以て我皆　しかるに其服其色の跡のきうねすれは円の忍び
なり其事を好まず様にし其忍あらきまこすれは見

の陽気なれ雷ありて雖陽にて千鉄砲のおとあるも驚かず
先陣にすゝみ二ろくんと　飲食耳も陽気なれ酒ほすくさま哉
味噌不食是口せん陽気なれその外よろずにも陽気あるなれ共
陽気を一生の事まもりて守る人は大事は家国を治め国を治む小事
は身上をおさめ一家を治む陽気のある人は十全に至る家とし給ふ
ままにはなしぬものなれたとへは十の内を八九はまもれ一つ二つはよ
残しをや用心し是まて夫まての陽気はいづれもなりのまゝ
人大方の陽気隠地志のこれなくてみとへしうちや陽気なしぬも
中華法をうすにみ久しき夫は家をよりてやうやく陽気しりふれ濃る
るものまてこれみなくめにの紛気みしらねまの内の事にあらす
まことを守りて西郷何ことのふかしとくはいかゝりあるの

まことよく了簡これありて此みなを抜出し　たゝ
として初の錯さへまぎれ人あれい御手無限ちるもの求めて
為何陽気に十全なしぬは人生の心人は方に尽す
此日本にては陽気十全の称は楠正成一人まさに調ふ
一向陽気の事なれしとこれ等にも出し行くれは道
世に織田信長こそ丈夫一生りっぱみ給ふをいうべし先程
より数代の事はうるいまゝとなし織田家は過世
うしなはれて人とも能くきい大事まれ紛事もすくれ
人とられ陽気ちいはって口惜なし故忠義の
事もある又は太閤様にも古今の大事帝語をみるのん
用心深よりのいれる故果報なる勢をたもつの中にも

一 天下の主ともなられし程の事にハ九経ハ大学あるか
程の儒書やうの書にも大学なとしよきたるにハ是其之有それ
も御の為しをよくする事に義理を正しくおしへ此の
人のなりこそは大学にてハなくあるへしとなりて
知りてをなとこそ学をしれし由なく其の能は
一 奢ハなくして倹約を用ひつ将すへのなし其能を
以て政務をとりしかれはハ道理にまかせ経世
をなしまけ誇し何れも奢ハ皆ある引当て見くるしく
為給ひけり古より聖君賢王の道理にまかせたり
忠廉の心ハなく財を用ひし倹約を用ひ専らとす

一 あしてありつ公事にて法度不相法度にて何かある
主君の能はは心つ鳥に向後何かにあさまをせよ
主人あるのまゝにいはれし手つかまつり心掛けはなく
取をとりそれの諸を改め給はふ免角いと在をも
人のましねあまかいしさのたてまつりしたかはあやまち
なき人ならのかやまちてるにまりやれるとあるにはちたい
いかに主人をとうしみなしかれゆきされはて能くつて
めしきも不足の心たえみ申つとめにやかけて主人にもあらく
其かの中に成、事申すつくて異なの後とさいかしさあ
人をとすてるにかをのせて不足て異なの後あるハこと君呼
ある人例に在成を不と主外しもの心子のとけきたにし

奉公をやりしけ前ニ主方ハ其様の口同様の人ニかゝり
いたし候の口同勤めかねとて主者の心を悦ハしめ主様
ケ様乃不調法主方ニて似合ぬ事と申候とて申分を言
其以後相致さずとの目ハ心得候よ申分ハ主理ニ致
し身のたゝやすみとなく相致ハ者ニて主人多く
其人ニても勤人の出来ハ其様乃なかりきものにて奉公人の出
来ぬ事のことを心掛候を懐み多く事ニてハ其様乃
利発の者を主人の目よりハ見ぬ物にて悦して益
なきの者ならぬ事ならぬことのつねなきことを見届ぬ所
ハ主人より見届其様ニ心掛けて不調法ニならぬ様なり

いかにもつゝしむる心付の第一なるにては仕候など
うすやつけハ先々きらハ主人の科にハ
一 主人の風俗ハ其まゝ下々迄仕候との風俗大切なれハ上の
ことを見ぬれ様に下のもの八勝手へ出し不様ニ行かし
るすなどの事にいりとの風俗なとを行安のものなれハその
主人迄て一家中の風俗悪しく見苦敷事なれハ
一 浮世まし身を持るにて保養まし行くなすしてハ行き
のうき時を婦色をまた色に心悪る事出来候ハ行き
あさきより朝まての行儀作法きめ一日その通り様ニ
ろ食るにつゆしく美味ハ食随ひてしうまきし物ニ
あしく平日の食事随分かろきにいたしひのことのしく

一 人月に両三度ハ沐浴もたへて互りし事もかなハぬ
近年日傭と云ふ者ありて手足人のしぬ遣(かた)役
するには通ふ所なり飯をみなくして盛にして通ふす
為にもて果を盛りしも幼きより針細工をす
まじめなくの人とあらしめてせめてつきたらぬよしある
為さん事日々年月より一日も休まず年月ふるさまゆへ
当世とも云ふゆへ休まずさせて二度ならば何事のわざを
いたしてもよくもなしとも稼ぐ人もなと日々のれ(?)
るものかなハりし故毎日行きあきいりし数とてやく
やすきわあて己ぬ中よりかけるを夫の食る

一 の頃りをまく備て神佛の祭と祭いまし門代
先祖の人の孝第とさんしあかし平日のおき
婦別限し食事の日々の事も又為ニ是れ
行ふことあるに越しても大すきてハ行やうき事
(朱)それ業の面不面あまつし也ある根えるべきるの二人
まん當家いつ事あてなくてハ成らぬ守一の事なくしては
為でやしうる事南中よ行かしで仕事をして例よ
かしつひものぞさるる云く根とてふしかる付ハ
ためのちよくしのかきを召遣ふ父母兄弟の中孔事
咄法みなれねばよく心もしは育ての為に兎も角も
困へのウし亜成人の様もよくしおんね根よ
行事しへの為てしかし

二月かな

おもし今年も生年悠ふ作ふはつ歳しなし

無事さくは育ちされ之ハ薬中ゟ出ぞ之

寛政二庚戌葉仲秋十日書